

## 編 集 後 記

本号二本の論考に奇しくも登場するのが大塩中齋である。論考はその行為を是非するものではなく、それぞれの文献が資料として、それも陽明学の一文獻として言及した事実を示していることに意義がある。大塩平八郎の乱といえ、それを勇氣ある起義と見るか体制への無謀な反乱と取るか、その評価そのものに、評価者の立場と時代性が表れる。漢末の黄巾（の乱）や清末の太平天国（の乱）とそれは同様である。

儒教は徳と秩序を貴ぶ。無謀な勇氣を評価しない。しかし、儒教の理想が大きく崩れようとするとき、「権」として力の行使を否定しない。それは儒教の理念が現実の統治、経世済民を最終目的とするからだ。そして陽明学は特に現実との密着した関係を重視する。今目の前にある現実に背を向けて何の学問か、という思いこそが陽明学の核心にある。だからといって無謀な反乱を肯定するわけではない。飽くまでも儒教の理念の遂行を根底に持つことによつて、それは世紀を超えて人の心をつかんできたのだと思つ。

鈴置氏の復刻した山田濟齋の年譜を通読して、その年次

的羅列にも見えるドライな事実の重層の中から、人文学的熱量を強烈に実感する。それは三島中洲が二松学舎を立ち上げ、山田濟齋がここで陽明学を語り継いだ、その根底にある熱量であり、それが二松学舎が二松学舎として続いてきた目に見えない学問の伝統を支えてきたのだと思つ。

いま目の前の現実に思いを致す。正義無くして何の学問か。二松の学問の伝統は守られなければならない。

二〇二四年三月

牧角悦子